

## 思考の対象<sup>(\*)</sup>

グレアム・プリースト  
(山口 尚訳)

### 第1節 問題の特徴づけ

ベニーは隣に住む男を恐れている。男は性悪な人物であり有罪判決を受けた犯罪者である。ベニーは男がある晩に押し入って自分を殺すことを恐れている。しかし実際には隣にこうした男は存在せず、家は空っぽである。ベニーは隣人たちが別の話題(隣の家と先日逮捕された殺人犯)についてしゃべっているのを耳にし、神経質な性質のため混乱した結論に至っただけである。

ではベニーは誰を恐れているのか。隣に住む男、つまり存在しない何か。これが明白な答えである。ペダンティックな表現で説明すれば次のようになる。文「xはyを恐れている」が自然な仕方の意味論的に文法解析されたならば、これはふたつのものの間の関係となるが、yに対応するものは存在してもしなくてもよい。同じことが他の志向的状态の対象についても成立する。他の志向的状态というのは具体的には「想像する」、「崇拜する」、「哀れむ」などを考えればよい。

思考の対象のこうした分析がとくにマイノングによって提唱されて以来、多くの者——ラッセルに端を発する——がこれに反感を覚えた。つまり、非存在の対象という概念には哲学的に虫の好かないところ

がある、そしてマイノング流の分析には致命的な反論がいくつも存在する、というわけである。私はこれに同意しない<sup>1)</sup>。加えて、「恐れられている」のような述語を非存在の対象なしで文法解析する他の試みは馴染みの反論に直面するのである。とはいえこれについてここで論じるつもりはないが。

マイノング主義に対する一般的な問題は、非存在の対象がある、ということにかかわるのではなく、これがどのような性質を有するかの説明にかかわる。例えば、あの隣に住む男はどのような性質を有するだろうか。一見、この男には隣に住むという性質が属しているように思われる。しかし、これは正しくない。というのも、実際には、誰も隣に住んでいないからである。他方、もし「存在するもの」としては隣に誰も住んでいない」と制限的な性質を加えて述べたとしても、うまくいかないケースが残る。というのは、非存在の対象をある性質の所有者として特徴づける場合、この性質を問題の非存在の対象が有しえないような特徴づけ方が存在するからである。例えば、ある人物を「彼は隣に住みかつ豚が空を飛ぶ」という仕方の特徴づけたとしよう。もしこの人物がこの条件を充足するとすれば、豚が空を飛ぶこと「という背理」が帰結してしまうのである。

この問題を解決するためにマイノング主義者はしばしば特徴性質 characterising property と非特徴性質 non-characterising property の区別(あるいは、同じ意味の術語であるが、核性質 nuclear property と非核性質 non-nuclear property の区別)を与える。記述が定義たりうるためには、その記述は特徴性質でなければならぬ。逆に、特徴性質でない記述は定義となりえない。しかしここで生じる問題は、特徴性質と非特徴性質の区別をしっかりとらした原理に基づいて説明した者が、私の知る限り、いまだ存在しないということである。

あるいは、非存在の対象とはそれが有すると見なされる性質をひとつも有さないものである、と主張し困難にチャレンジすることはできる。実際、「恐れる」を二項述語として分析する際に、非存在の対象が性質を有することを要求するいかなる制約も存在しない。したがって、「隣に住む男」やこれに類する句が空集合を指示すると取り決め、これで話を済ませてしまおうというやり方が思いつく。とはいえこのやり方もうまくいかないだろう。ベニーは隣に住む男を恐れているが、ベニーはフランス国王を恐れているわけではない。非存在の対象はそれが有するとされる性質を有する意味で有しているのである。では、どんな意味で、だろうか。

私はこの問題へのひとつの解決策を提案したい。私の提案によれば、あの隣に住む男は隣に住んでおらず、この男はベニーの恐怖がそれへ帰属させる諸性質を何ひとつ有していない。他方で、ベニーは特定の世界のあり方を恐れているのだが、私の提案によれば、隣に住む男はベニーが恐れている世界のあり方において隣に住むという性質を有している。同様に、私の提案によれば、もしベニーが性質Pをもつ

何かxを崇拜しているならば、xはベニーが信じている世界のあり方においてPを有する。また、もしベニーが性質Pをもつ何かxを想像しているならば、xはベニーが想像している世界のあり方においてPを有する。一般化して言えば、ある対象xが思考の対象として性質Pを有している」と言うことは  $\exists w(x \in w \wedge P(x))$  と言うことである(ここでaは思考主体であり、いわゆる志向性オペレータの適当な心理状態——例えば「世界が……であることを恐れる」、「世界が……であることを想像する」、「世界が……であることを信じる」など——である)。ちなみに「小説の登場人物などの」虚構の対象は非存在の対象の特別なケースである。つまりこの種の対象は、虚構の対象として、作者が想像する世界のあり方において帰属される諸性質を有している。

## 第2節 形式的構成

以上の提案を正確なものにするために形式的な意味論を与えよう。上記の分析は命題に作用する志向性オペレータを用いているので、このオペレータを分析することが必要となる。私は標準的な可能世界意味論を採用する。本質的な点を述べれば、 $\omega$ が世界wで真であるのは、aがφしている世界のあり方と両立するすべての世界においてAが真であるとき、かつこのときに限る。(ちなみにベニーが恐れている世界のあり方はひとつの世界を一意的に特徴づけてはいない。ベニーの恐怖によって特徴づけられた世界は、例えば、隣に住む男が右利きか左利きかについて不確定的である)。

Lを第一階言語(単純化のため関数記号をもたないとする)としよ

う。さしあたりLは等号も記述も含まない(これらは次節で扱われる)。Lは非存在の対象の名前を含みうる。述語には二種類のものが存在する。第一に志向性述語である。これらは思考主体の心理状態にかかわるものであり、例えば「恐れる」や「愛する」などがある。第二に通常の外延述語であり、例えば「蹴る」や「つかむ」などである。単純化のため、述語はすべて一項述語であるとする。加えて、以下では思考主体を特定の者に固定する。これによって思考主体への言及を省くことができる。必要に応じて、外延述語へ添え字eをつけ、志向性述語へ添え字iをつけ、それぞれP<sub>i</sub>とP<sub>e</sub>と表現する。外延述語の中でも重要なものは存在述語である。これをEと表現しよう。また命題的態度を表現するオペレータ——つまり志向性オペレータ——の集合を甲とする。思考主体が固定されているので、志向性オペレータは単に文へ作用するオペレータと見なされる。

Lの解釈として、パラコンシステム・ロジックLPに様相オペレータを加えたシステムに対する意味論を採用する。この選択は、大方、恣意的である。他の意味論で解釈を与えるほうがよいと考える読者は、ある程度までは自由に、他のものを用いる。私がLPを選んだのは、LPがひとつの重要な性質を有しているためであり、それは、任意の文集合(これはすべての文の集合でもよい)が何らかの世界で真になる、ということである。この性質が重要であるのは、人間は人間である限り——、どのような世界のあり方でも、それを恐れたり想像したりしうるからである。LPの代わりに他の論理システムが用いられるとしても、少なくともこの性質は充たされなくてはならない。

Lに対する解釈は構造  $\langle D, W, @, (R_a: \omega \in W) \rangle$  である。Dは(対象の)空でない集合であり、Wは(世界の)空でない集合である。@  $(a, w)$  は現実世界である。任意の  $\omega \in W$  について  $R_a$  はW上の関係である(直感的に言えば  $R_a$  が成立するのは、世界xにおいて問題の思考主体がφしている世界のあり方にyが一致するとき、かつこのときに限る)。各々の定項cについて、 $\exists c \in D$  である  $\exists c$  はcの指示対象である。各々のn項述語Pについて、 $\exists P$  は  $w \in W$  をあるふたつ組  $\langle P_{a+}, P_{a-} \rangle$  へ写像する。つまり  $P_{a+} \cup P_{a-} = D$  である  $(P_{a+}$  と  $P_{a-}$  はPのwでの外延 extension と反外延 anti-extension である)。Lの解釈はすべて、非存在の対象が外延述語を充足しないことを保証するため、次の条件も充たさなくてはならない。つまり、任意の外延述語P<sub>i</sub> について、

$$\exists x \in P_{a+} \text{ であるなら } \exists x \in P_{a-} \text{ である。}$$

特定の解釈が与えられると、標準的なLPの仕方各論理式へ真理値が割り当てられる。真理概念について二項関係  $R_a$  が存在し、任意の文Aについて、 $A_{a+}$  であるか、 $A_{a-}$  であるか、その両方であるか、の三つのうちのどれかが成立する。志向性オペレータに関する真理条件は次である。

$$\exists A_{a+} \text{ であるのは、 } \exists w R_a \text{ を充たす任意の } \omega \in W \text{ について } A_{a+} \text{ のとき、かつこのときに限る。}$$

$\exists A p_0$ であるのは、 $wR_p$ を充たすある世界 $w$  ( $w \in W$ ) が存在し  $A p_0$ のとき、かつこのときに限る。

量化詞については、領域 $D$ の対象がすべて何らかの名前を有すると仮定し真理条件を与える。この仮定は非本質的であるが、これによって複雑な「充足」概念を持ち出す必要がなくなり、「真理」概念だけを語を済ませることが出来る。つまり  $[A(x)]$ を $A$ における $x$ の自由な現れに $c$ を代入したものとすると]

$\exists x A p_1$ であるのは、ある $c$ が存在し  $A(c) p_1$ のとき、かつこのときに限る。

$\exists x A p_0$ であるのは、任意の $c$ について  $A(c) p_0$ のとき、かつこのときに限る。

となる。 $\forall$ の真理条件・虚偽条件は $\exists$ のそれと双対的である。ただし、量化詞には存在含意がない。それゆえ、 $A$ を充足する何かが存在するという事実を表現する場合には、 $\exists x (Ex \wedge A)$ と書く必要がある。「妥当性 validity」の概念は、すべての解釈において@で真であることとして定義される。

以上の意味論は前節で記述された意味論的直感の多くをつかんでいる。(ある世界で)存在する対象もあれば、存在しない対象もある。存在する対象へはいかなる制約もない。非存在の対象はけっして外延述語を充たさない(ただし、 $\sim Ex$ のように、外延述語を含む文を充

する世界においてベニーを殺すのは他ならぬ、 $\sim$ に住む男(固定的に指示された人物)である。現象学的に言っても、志向的態度が対象を志向することは明白である。このことは、たとえこの対象が名前で特徴づけられようが記述で特徴づけられようが、またフッサールが強調するように、たとえこの志向される対象が存在しようがしまいが、つねに成立している。

。項の「表示 denotation」と真偽は、今や、交互的な帰納法で定義されることになる。とくに表示に関する帰納的定義の条項は次である。 $A(x)$ が高々ひとつの自由変項 $x$ を有する論理式である場合「 $A$ を空集合とする」

$\lambda a \{a : A(a) p @1\} \neq \lambda$ であるならば、この集合のあるメンバー $a$ が存在し  $\sim$   $g(xA(x))$ は $g(a)$ となる。

$\lambda a \{a : A(a) p @1\} = \lambda$ であるならば、 $z \in E_{@}$ をみたすある $z$ が存在し、 $g(xA(x))$ は $z$ となる。

明らかのように、これがキチンとした定義であるためには、@に非存在の対象がある必要がある。よってこの解釈も次の条件を満たす必要がある。

$E_{@} \neq \lambda$

それゆえ以下ではこれを前提しよう。以上の表示条件は次に十分に保証する。

思考の対象

たすこと(はある)。<sup>⑥</sup>他方、非存在の対象は志向性述語 $P$ を充たすこと(あれば、 $\sim A(x)$ という形式の論理式を充たすこともある。もし言語が様相オペレータを含むならば、非存在の対象は様相オペレータが付加された論理式を充たし「様相的性質」を有することもできる。例えば、もし可能性オペレータ $\Diamond$ があり、これが、通常どおり、ある世界(あるいは世界の一定の部分集合に属する世界)において $A$ が真であるときに $\Diamond A$ が真であると解釈されるならば、文 $\sim Ex \wedge \Diamond Ex$ を真とするモデルをつくることは可能である。ここで、 $a$ は(単に)可能的な対象である。

### 第3節 記述と同一性

以上の道具立てへ「記述」概念を加えることは以下のようになされる。まず $\epsilon$ を通常の構文論的機能(不確定記述オペレータとする(本稿では確定記述を扱わないが、確定記述も必要な一意性条件を加えるだけで同じように扱われよう)。以下では記述は固定指示詞として扱われる。たしかにこの前提を落として私たちの意味論をより一般的にすることもできるが、この修正は事態を複雑にする(というのもスコープの区別を曖昧にしないために、抽象などの追加的な道具立てが必要になるからである)。そして、本稿の目標のためには、こうした追加的な複雑さは必要ないと思われる。さらに、記述が思考の対象を特徴づける場合には、少なくともマイノク主義者にとつては、記述は固定的に機能するように感じられる。例えばベニーは隣に住む男が彼を殺すことを恐れている。この場合、ベニーの恐怖を実現

もし@で  $Ex \sim Ex$  が成立するならば、@で  $Pe \sim Pe$  が成立する。(逆は明らか)

ただしこの事実は@以外の世界では必ずしも成立しない。なぜなら。項は固定指示的であるからである。「つまり  $Ex$  は現実世界で指示を固定されるので、ある $w$ で  $Ex$  が成立するとしても、この $w$ で  $Pe \sim Pe$  が成立するとは限らない」。ちなみに非存在の対象を表示する。項もこの前提条件を満足しうる。例えば、@で  $Ex \sim Ex$  は真であるので、 $\sim Ex \sim Ex$  も@で成立する。

次の点にも注意しよう。どのようにして。項の表示対象が適切な集合から選出されるかについては何も想定されていない。例えば、。項の表示対象は領域 $D$ の部分集合上の選択関数 choice-function によつては選出される(こうした選択関数の使用は記述の意味論においてよくある話であるが)。このやり方は。項へ確定的な外延性を与えるが  $(a : A(a) p @1) = (b : B(b) p @1) \neq \lambda$  であるならば、 $g(xA(x)) = g(xB(x))$  となる。実際には選出は純粹に不確定的である。選出の不確定性は、単に束縛変項を置き換えるだけで表示対象が変化しうるといふ帰結を有する。かくして  $Ex(x)$  と  $Ex(y)$  は異なる物を表示している。この点は私の理論の強みである。ベニーが隣に住む男を恐れている、ベニーも隣に住む男を恐れているとしよう。どちらの恐怖の対象も非存在的である。さて彼らは同じ男を恐れているか否か。例えば、ベニーの恐怖の対象は長身で髭モシヤであり、ベニーの恐怖の対象は短身できれいに髭を剃っているかもしれない。もし彼らが同じ男を恐れているならば、状況は文  $Ex \sim Ex \wedge \sim Pe \sim Pe$  によつて表現される。

もし彼らが別の男を恐れているならば、状況は文  $B_{x \in M} P_{x \in M} a$  によって表現される。そして——容易にチェックできるが——前者は  $E_{x \in M} (B_{x \in M} P_{x \in M} a)$  を導出するが、他方で、表示の不確定性が前提されれば、後者はこれを導出しない。

ところで同一の男について語ることは等号あるいは同一性の問題を喚起する。同一性について次のような意見があるかもしれない。同一性は通常の外延述語であり、世界  $w$  におけるその外延は  $\langle \lambda x \lambda y (x \in D \cup E_{x \in M} y)) \rangle$  である。たしかにこの意味論は同一者に関する代入則を妥当なものにする。しかし、同一律  $\forall x \forall y (x = y)$  は妥当とならず、これは存在する  $a$  についてのみ成立することになる。このことはいくつかの同一性を自然な仕方では表現できなくしてしまう。例えば、ベニーとヘニーが同じ物を恐れているという事実は  $E_{x \in M} (B_{x \in M} P_{x \in M} a)$  によって表現されない。というのもこの文は、恐怖の対象が存在しないときには、真でないからである（もちろんこの事実は他の仕方——例えば  $E_{x \in M} (B_{x \in M} P_{x \in M} a)$ ——で表現されうるが）。私は代替案を提示したい。たしかに同一性は、標準的な理解に従えば、志向性述語でありえない。しかし私は同一性を特別なケースの述語とし（例えば、これを特別なタイプの論理的述語とし）、非存在の対象が同一性述語を充たすことを認める。この場合、同一性の外延はどの世界でも通常の  $\langle \lambda x \lambda y : x = y \rangle$  とすればよい（その反外延は恣意的に選びうる）。これが同一性の最もシンプルな取扱いである。これは標準的な同一律を妥当とするので、私には好ましいと思われる。

たとえ  $A(x)$  を充足するものが何も存在しないとしても、 $\exists x A(x)$  はなおも何かを表示する。たとえ  $\exists x A(x)$  が「現実」に  $A(x)$  を充足しないとしても、 $\exists x A(x)$  は想像されたり信じられたりする仕方において  $A(x)$  を充足する。かくして、黄金の山—— $\exists x (G_{x \in M} M_{x \in M})$ ——は伝説の中で語られるような世界において「黄金でありかつ山である」という性質を有する。もし  $\exists x (G_{x \in M} M_{x \in M})$  であるならば、 $\exists (G_{x \in M} M_{x \in M})$  を真とする解釈を構築することは容易である。

(7) 上記の意味論は「矛盾的」な非存在の対象および「不完全」な非存在の対象を認めうる。矛盾の対象については、ひとは丸くかつ丸くない物について思考しうる。同じ  $\exists x (R_{x \in M} R_{x \in M})$  とする。この場合、 $\exists (R_{x \in M} R_{x \in M})$  を真とする解釈を構築することは容易である。不完全な対象については、例えば、ホームズは「コナン・ドイルが想像する世界で」右利きか左利きのいずれかであるが、ホームズが（そのような世界で）右利きであるとかホームズが（そのような世界で）左利きであるとかいう事実はない。同じ  $\exists (L_{x \in M} R_{x \in M})$  が真であるが  $\exists (L_{x \in M} R_{x \in M})$  も真でないモデルをつくることは容易である（例えば  $h$  の表示対象は  $\exists R_{x \in M}$  を充たす  $w$  の世界  $w$  でも  $L$  の外延  $R$  の外延のいずれかに属すが、他方で  $h$  の表示対象は  $\exists R_{x \in M}$  を充たすすべての世界  $w$  で  $L$  の外延に属すわけではなく、また  $h$  の表示対象は  $\exists R_{x \in M}$  を充たすすべての世界  $w$  で  $R$  の外延に属すわけではないというモデルがある）。

第4節 諸帰結

以上の説明は多くの利点を有するように思われる。(1) 志向性述語の自然な文法解析が維持される。(2) 非存在の対象に関する志向性真理（例えばギリシア人はポセイドンを崇拜していたなど）がうまく取り込める。例えば、 $G_{x \in M} E_{x \in M}$  を真にするモデルを構築するのは容易である。(3) 非存在の対象が外延的性質を有することはプロックされる。かくして、ホームズがペーカー街に住んでいたことは偽になる（つまり、任意の解釈において  $B_{x \in M}$  は偽になる）。実際、ペーカー街にシャーロック・ホームズが本当に住んだことはないように思われる。(4) この種の「虚構的真理」の受容可能性は別の仕方でも取り込める。コナン・ドイルが想像したような世界では、ホームズはペーカー街に住んでいた  $(\exists B_{x \in M} E_{x \in M})$  を真にするモデルを構築するのは容易である。(5) 私たちが非存在の対象について述べたくなるのは容易である。(6) 私たちが非存在の対象について述べたくなるのは容易である。するとホームズが  $a$  よりも有名であることは真である。つまり、多くのひととは  $a$  よりもホームズについての話をよく知っている（ここで「……」についての話を知っている」は志向性述語である）。たしかにこの比較文は私たちが説明で用いてきた言語では——その表現力の不足から——形式化されえない。だが言語と意味論を拡張し、この比較文を真にすることは容易である。詳細は練習問題として残しておきた。

(6) 記述に関して以下のことが成立する。 $\exists x A(x)$  が  $A(x)$  を充足するのは、ある何かが  $A(x)$  を充足するとき、かつこのときに限る。た

第5節 ふたつの反論

最後に私の説明へのふたつの反論について論じたい。第一の反論は容易に応答できる。私の説明は「虚構の真理」をうまく取り込め、同時に、虚構の対象と志向的態度（「……」についての話をよく知っている）のような）に関する真理をうまく取り込むことができる。しかし外延述語に関わる虚構の対象の真理も存在する。例えばトールキンはビルボ・バギンズがホビットであり背が低いと語っている。プリーストは6フィート4インチ「約195センチ」である。それゆえプリーストがビルボより背が高いというのは真と思われる。しかし「……」より背が高い」というのは外延述語である。私は、次のような仕方での種の真理もうまく取り込みうる、と応答したい。ある数  $x$  と  $y$  が存在し、 $x$  はプリーストの身長であり、 $y$  は小説世界におけるビルボの身長であり、 $x > y$  である。 $\exists (x \in EX_{x \in M} (P_{x \in M} \exists B_{x \in M} x))$  が真となるモデルを構築することは容易である。

その他の同様な事例が同じ仕方でも扱われうる（その際に若干の工夫が必要となるかもしれないが）。例えば、ある現実の人物が（實在の文脈で）怒っているより、ある虚構の人物の方が（虚構的文脈で）より激しく怒っていると言われうる。たしかに、怒りの程度について文字どおり語ることは身長程度について語るよりも不自然である。しかしながら、やはり、私にはこうした語りが可能であると思われる。（怒りの程度は線形順序つまり全順序を構成しないかもしれないが）。

第二の反論は応答が難しい。注意深く考察したい。ベニーの隣に住む男あるいはホームズのような非存在の対象について、何がこれらを

異なる対象にしているだろうか。それは、隣に住む男がホームズとは異なる外延的性質を現実世界で有しているという事態ではありえない。というのもそれらは現実世界では外延的性質を有さないからである。「他方で」たしかにそれらは現実世界で異なる志向的性質を有している。例えばベニーは隣に住む男を恐れているがホームズを恐れてはいない。しかしながらこの事実がそれらを異なる対象にしているわけではない。ホームズと隣に住む男は、恐れられたり恐れられなかったりする以前から、異なる対象であるのでなければならぬ。というのも、さもなければ一方を恐れて他方を恐れられないということが可能でなかったらうからである。加えていずれにせよ次のように言える。異なる非存在の対象が現実世界で同じ志向的性質を有することも可能である。例えば、ホームズも隣の男もけつしてひとの志向的態度の対象とならなかったかもしれない。

たしかに他の世界においてはホームズと隣に住む男は異なる性質を有する。例えば、ベニーが恐れている事物のあり方と両立可能な世界では、隣に住む男は《隣に住む》という性質を有しているが、ホームズはこの性質を有さない。しかし次のような世界 $w$ も存在している。 $w$ はベニーが恐れている事物のあり方と両立せず、 $w$ においてはホームズが《隣に住む》という性質を有し、隣に住む男はその性質を有していない。「かくして、他の世界で異なる性質を有することも非存在の対象の区別には役立たないことが分かる」

では、何が隣に住む男を隣に住む男にし、それをホームズと区別するのだろうか。修辭的な回答は「何も無い」である。つまり私の説明はまだ「遊び」を残しているのである。現在問われている問題には標

語っているということである。そして、ある特定の質について語っていると約定することに反論が生じえないと同様に、ある人物について語ると約定することにも反論は生じえない。他の意見の提唱者たちによれば、特定の質について語ることに問題がない。彼らは「どうやって我々は(他の世界の)この質が赤色の質であると知るのか」などと尋ねない。しかし彼らによれば特定の人物について語ることに問題がある。しかし私にはその理由が分からない。どうして片方のケースだけに文句を言うのか。これは実に誤った可能世界観に由来すると思われる。その見かたによれば、可能世界はどこか他の違い場所に存在し、望遠鏡を通してのみ観察されるものである。

その他の可能な回答も存在する。しかしこれらのどれかひとつを推奨することは本稿の目的ではない。私は単に次のことを指摘したい。それは、ここで扱われている問題は——存在する対象を扱うか非存在の対象を扱うかかわりなく——そもそも可能世界意味論を用いるすべての人にとっての問題である、という点である。そして、私の見限り、存在する対象に関する解決策はどれも非存在の対象に関する解決策として役立つ。

ひょっとしたら、私の気づいていない理由によって、今述べたことは事実でないかもしれない。また、私の説明に対する他の反論が存在し、私の説明が間違っていることが示されるかもしれない。しかし、もしこうした反論が存在せず、かつ私の意味論が非存在の対象の性質の説明について要求される大半の事柄を満足すると考えられるなら

準的な可能世界意味論に関する類比的対応物が存在する。私たちは現実世界のニクソンが誰であるかを知っている。しかし他の世界においては何かある対象をニクソンとしそれをクリントンと区別するのか。というのも問題の人物は現実世界でニクソンが有する性質をひとつも共有しないかもしれないからである。実際、この人物とニクソンは異なる名前、異なる職業、異なる性別を有するかもしれない。

この問題に対しては多くの可能的な回答が存在することが知られている。そのひとつはいわゆる「此物性[isoccity]」つまり個体的本質に訴えるものである。この場合、ニクソンは彼の本質を規定する本質的性質を有する。例えば、「ニクソンと同一である」という性質はニクソンの本質的性質の役割を演じうる(この種の性質があるとして)。というのもこの性質を有するのはニクソンのみだからである。これと同じ仕方では隣に住む男やホームズについての問題も解決しうる。

他の回答は、例えば、ニクソンを同定する問題を無意味なものとして棄却する。つまり、こうした問題は可能世界の本性の誤った理解に基づく、というわけである。この場合、ある可能世界においてある対象をニクソン(あるいはホームズや隣に住む男)とするものは、単に、私たちがそれのように特定するという事実を過ぎない。例えばクリプキはこの立場をとる。彼自身の言葉を引こう。

我々が「もしニクソンがあの上院議員へ賄賂を贈っていたならば、彼はカーズウェルを判事に任命できただろう」と言うとき、このような状況の記述において主張されている事柄は、私たちがまさにニクソン、カーズウェル、そしてあの上院議員について

ば、私の説明は十分にもっともらしい説明である——このように私は結論したい。

(\*) 本稿はGraham Priest, 2000: "Objects of Thought," *Australasian Journal of Philosophy* 78: 494-502 の全訳である(翻訳を快諾して下さったフリード教授およびオーストラレイシア哲学雑誌 <http://www.informaworld.com/samplearticle-content.html?id=713659165> に取御礼申し上げます)。

著者の経歴を簡単に紹介したい。グレアム・プリーストはイギリス出身で現在メルボルン大学の教授である。彼は1958年にロンドンで生まれケンブリッジ大学とロンドン経済学校で学んだ。個人的に聞いた話であるが、はじめは数学を中心に勉強したらしい。彼は非古典論理の権威であり、バラコンシステント・ロジックの推奨者として有名である。本稿では非古典論理の話題と密接に関連する「ハイノング主義」の立場が論じられている。プリーストは真正正銘のマイノング主義者である。この立場の利点は志向的態度を報告する文へ自然な文法解析と意味論が与えられるという点である。ただし「非存在の対象」という概念には多くの問題がつきまとう。本稿は、こうした問題のひとつ——非存在の対象と性質の問題——を解決し、マイノング主義を受け入れうるものとするプロジェクトの一環と位置づけられよう。

文献

- Griffin, N. 1998: "Problems in Item Theory," a paper read at the 1998 meeting of the Australasian Association for Logic.
- Kaplan, D. 1975: "How to Russell Frege-Church," *Journal of Philosophy* 72: 716-29.

Kripke, S. 1977: "Identity and Necessity," ch.2 of S. P. Schwarz (ed.), *Naming, Necessity and Natural Kinds*. Cornell University Press.

Lewis, D. 1968: "Counterpart Theory and Quantified Modal Logic," *Journal of Philosophy* 65, 113-26.

Nolan, D. 1998: "An Uneasy Marriage," a talk given at the 1998 meeting of the Australasian Association for Logic.

Parsons, T. 1980: *Nonexistent Objects*, Yale University Press.

Priest, G. 1979: "Indefinite Descriptions," *Logique et Analyse* 85-6: 5-21.

——— 1987: *In Contradiction*, Martinus Nijhoff.

——— 1995: "Multiple Denotation, Ambiguity, and the Strange Case of the Missing Amoeba," *Logique et Analyse* 150-2: 361-73.

——— 1997: "On a Paradox of Hilbert and Bernays," *Journal of Philosophical Logic* 26: 45-56.

——— 1998: "The Trivial Object and the Non-Triviality of a Semantically Closed Theory with Descriptions," *Journal of Applied and Non-classical Logic* 8, 171-83.

Routley, R. 1980: *Exploring Meinong's Jungle and Beyond*, Philosophy Department, RISSS, Canberra.

Zalta, E. 1988: *Intentional Logic and the Metaphysics of Intentionality*, MIT Press.

註

(1) Parsons 1980, Zalta 1988, ネゴトマンツ(Routley 1980, esp. chs. 3 and 4 は標準的な反論に対してマイノンクを擁護している。  
これらの論者は、非存在的対象が「ある」という主張に対して私が

最も手「わいと考える反論を議論していない。それは次のようなものである。もちろん、非存在的対象があると信じたとしても、言語の任意の項が何らかの対象を表示すると信じる必要はない。とはいえ、非存在的対象の理論が目指す第一の目標が思考の対象を分析するための手段提供であると前提され、かつ任意の記述に対して何らかの対象が妥当しうると前提されるならば、任意の項が何かを表示すると考えることは自然である。さて、意味論的に関じた言語および標準的な同一律が与えられれば、任意の項が何かを表示するという仮定はいわゆる「トリヴァイアリティ」を帰結する。例えば「この項の指示対象に1を加えたもの」という項を考えてみよう。この項を $x$ とし、 $x$ が数 $n$ を表示するとする。このとき $x$ は数 $n+1$ も表示する。かくして $n=n+1$ となり0=1が帰結する。これは明らかに受け入れがたい。以上については Priest 1997 を参照せよ。

この問題の最も有望なマイノンク主義的解決は以下である。パラドクシカルな文がひとつ以上の真理値を有するのと同様に、上の $x$ のようなパラドクシカルな名前もひとつ以上の指示対象を有しうる。結局、 $x$ は $n$ と $n+1$ を表示し、かつ $n$ と $n+1$ は異なる対象である。複数指示の論理においては等号の推移律は成立せず (Priest 1995 を参照せよ)。<sup>1</sup>これによってトリヴァイアリティ論証はブロックされる。これは Priest 1998 で証明された。

(2) こうした他の試みのうちで最もありふれたものは「 $x$ は $y$ を恐れている」(2a) を行為者と何らかの代理的对象——とくに心的対象——との間の関係へ再分析することである。この場合、「ベニーは隣に住む男を恐れている」は「ベニーは彼の『恐怖ボックス』の内に隣に住む男と

いう表象を入れている」と理解される。この関係を $R$ と呼ぼう。この提案は見かけどおりには機能しない。例えば、この分析に従うと、文「ベニーは隣に住む男を恐れているが、この男はつい先日引越した」はナンセンスになる。この文は $\exists x(\exists y(Fx \wedge My))$ である。第一の連言肢を真にするためには量化詞は表象の上を動く必要があるが、このとき第二の連言肢はナンセンスになる。というのもその表象がつい先日引越すことではないからである。たしかにこの見解を「 $x$ は $y$ の表象である」(2b) という関係を導入することから救出することはできる。この場合、問題の文は $\exists x(\exists y(Fx \wedge Ry \wedge Mx))$ となる。しかし、「 $R$ 」で問題が再び始まってしまふ。例えば「ベニーとベニーはある同じものを恐れている」はどう理解すればよいか。 $\exists x(\exists y(Fx \wedge Fy))$ は役に立たない。というのもベニーとベニーが問題の対象の同じ心的表象を有しているかどうかの保証はないからである。 $\exists x(\exists y(\exists z(Fx \wedge Fy \wedge Rz \wedge RyRz)))$ はどうだろうか。もし両者が同じ存在する対象 ( $z$ ) を恐れているならば、この分析は機能しうる。しかし問題の対象が存在しないこともありうる。そして、もし存在しないのであれば、非存在的対象がやはり導入されていることになる。

(3) 形式的には問題の記述は $\exists x(\exists y(\exists z(Axz \wedge Ayz)))$ である。これを $\exists$ と呼ぼう。もし $\exists$ が定義たりうるならば、 $\exists$ が成立する。

(4) 同様のアイデアが Griffin 1998 と Nolan 1998 で表明されている。

(5) 私が標準的な可能世界意味論を採用するのは、それが正しいと思われるからではない。実際、私はそれが正しくないと考えている。例えば、 $A$ を任意の論理的真理とするとき、標準的な可能世界意味論は $\exists wA$ を真としてしまう。より洗練された可能世界意味論はこの事態を避けるこ

とができるが、本稿では概念を単純なものに留め、思考の対象に閃く私のアプローチの特徴的な点を強調することにした。

(6) とはいえ志向性述語が内包的であるというわけではない。実際、私が $x$ について思考しており、かつ $x$ は $y$ であるとき、私が $y$ について思考していることが帰結する。だが、こうしたケースにおいて $x$ が $y$ であることに私が気づいていないこともありうる。

(7) より一般的には、複数の $n$ 項述語が存在し代入項の座の中で志向的であるものと、志向的でないものが区別される。

(8) Priest 1987, ch.6 を参照せよ。

(9) とくに「 $\exists$ 」modus ponens が適用されうる条件オペレータを有する言語が採用される場合、意味論は、例えばBのような何らかの関連性論理に対する可能世界意味論を用いることができるであろう。

(10) 注意しておくが、ここで記述された見解は肯定的性質と否定的性質の怪しい二分法を前提してはいない。というのも、例えば、「……は光を通す」と「……は光を遮蔽する」のどちらが一項述語で表現される真の肯定的性質かを決定する必要はないからである。どちらも外延述語であり、一項述語によって表現されうる。このふたつの性質の両立不可能性は、どの(物理的な)存在する対象もその一方を有するが両方を有することはないという事実に表示されている。そして非存在的対象はどちらも有さない。

(11) 技術的に言えば、こうした選出を扱う場合、Priest 1979 でなされたように項から選出関数への写像が用いられる。

(12) ここでは、 $A$ の内部に別の $\exists$ のスコープがある場合、このスコープの内部に $x$ が存在しないことが前提されている。というのも、 $\exists$ 項の表示

対象は完全に不確定的であるので、そのスコープの内部においては代入が、多くの場合、可能でないからである。ただし代入可能性は適切な調整のもとで保持される。

- (13) 実際には事態はそれほど単純でない。というのもトールキンの小説はビルボの確定的な性質を特定していないからである。それゆえ、一定の身長範囲が存在することになり、ビルボは小説世界においてこの範囲のある身長を有するが、この範囲のどの身長もブリストのそれより低い、ということになる。とはいえこの追加的な複雑さは本質的な問題を生まない。

(14) 例えはKaplan 1975を参照せよ。

(15) Kripke 1977, p. 82.

- (16) 例えは、対象が複数の世界に存在するというアイデアを放棄し、対象の対応者について語るといふ仕方がある。これはLewis 1988でなされている。

(17) この論文の草稿はメルボルン大学で催された1999年の Australasian Association for Logic の集会のために書かれた。出席された方の多くの有益な意見に感謝を申し上げたい。また、この論文の初期の草稿へコメントを頂いたエド・ザルタへも心からの感謝を申し上げたい。

## 統合失調症における両価的葛藤のヴァリエーション

角田 京子

### I はじめに

#### (1) 問題と目的

本研究は、統合失調症の比較的初期においてみられる葛藤的な両価性症状のヴァリエーションを取り上げ、その各ヴァリエーションの言語構造を分析し、臨床的観点から論じるものである。これによって、主体と記号体系との構造によって決定つけられた一般的な倫理的問題と、統合失調症の疾病特異的な問題を抽出する。

研究対象とした呈示症例は総て自験例で、若年期の統合失調症5例である。これらのケースにおける両価性は、必ずしも主要症状ではなかったが、臨床的には看過できないものであった。ある場合には患者が日常生活を送ることの困難さを端的に現し、またある場合には自殺の危険を示唆していた。こうした両価性は、患者が生きていることそのものを問う、実存的な葛藤であるとも言えるだろう。

統合失調症の病態が深刻な時、あるいは病初期や再燃時の不安定な時期、両価性は心理的葛藤を伴うことが多い。しかも心の力動を表面させるにもかかわらず、サイコセラピューティックな関与は寄せ付けられない強固さを示す。こうした両価性が治療者に統合失調症の困難さをとりわけ感じさせるのは、次の二つの様態ではないだろうか。まず一

つは、両価的葛藤が日常の些細な行為を巡って生起し、ささやかな生活でさえ患者にとっては苦痛に満ちたものであるような様態。もう一つは、両価的葛藤が明白にジレンマの構造を持っており、二者択一のどちらを選択しても、患者には救いがないという様態。さらにもう一つ付け加えるならば、こうした現象の疾病特異性は疑問視されるかもしれないが、患者が「生きるか、死ぬか。」という直接的に実存的な表現をもって自らの生の是非を問い続けるといふ様態。最後に付け加えた様態は、前の二つの様態に内在しているのかもしれない。実はこの最後の様態における両価性は原始的なもので、もともと主体と世界との関係に内在しており、統合失調症の危機的な病態において顕在化するのではないか、というのが著者の主張でもある。

#### (2) 展望

両価性という概念は、Bealer<sup>(1975)</sup> E.によって統合失調症の基礎症状の一つとして提示され、相反する二つの心的要素が同時に存在している現象であると定義されている。Bealerは、心理学的には知・情・意の各カテゴリーにおける両価性について解説し、症候論的には統合失調症の基礎症状そのものとしての意志の両価性(註: Ambitendenz。[両立傾向]や[両価傾向]と和訳されることが多いが、Tendenzは